

『戦車に乗る』

交流学科 2 年生 加地弘明



サイパンでは、戦争中使用された日本軍戦車の残骸を多く見たが、どれも驚くほど小さかった。サイパン国際空港付近に放置されていた日本軍の「97式中戦車」は、当時の原形を比較的良くとどめていて 砲塔周辺の手すりまで残っている。不謹慎かとも思ったが、側面部に大きな穴が開いていたので、実際に搭乗してみた。車体の底が完全に抜けているにも関わらず、かがまないと身動きできない狭さだ。この窮屈なスペースに なんと4人 — 車輻を指揮する車長、操縦を行う操縦手、主砲を照準し射撃を行う砲手、砲弾の装填を行う装填手 — が搭乗し、敵の攻撃に向かっていった、というのは信じられない。しかし実際に この戦車にも日本兵たちがそうやって乗り込み、米軍の砲弾に向かっていったのだ。

車両前部にあるのぞき窓の視界の狭さにも驚いた。敵にさらず機会が一番多い前面部であるから、あんまり大きな穴を開けるわけにもいかないのだろうが、一般的な車両の窓と比較して、外からかろうじて目の部分だけが見える狭さだ。これじゃあ対戦車地雷が置いてあっても気づくのは困難なのではないかと思った。まして、側面や上空を確認することなどは不可能である。

また、その戦車の装甲の薄さも ショックだった。薄いといっても、戦闘車両であるのだから 人が殴る蹴るをしたところでビクともしないほどの硬さは当然あり、車体の全体重量は14トン以上ある。しかしこの戦車の前面装甲25mmに対して、同じ米軍の中戦車であったM4「シャーマン」の前面装甲は89mmあり、車体重量も30～34

トンと倍以上である。つまり、日本の戦車兵は、その3倍以上の装甲厚を持つ敵戦車に立ち向かわなければならなかったのだ。

60年以上雨風にさらされてきたせいか、あるいは戦争中受けた被弾跡なのか、放置されていた日本軍戦車の各部分には大きな穴が開いており、側面装甲はほぼ完全になくなっていった。チャラン・カノアのビーチ沖に残る米軍戦車の残骸が、海水にさらされてもなおその原形をとどめているのと対照的である。こうした性能差がありながらも、日本の戦車隊兵士はこのような小さな戦車に命を賭して戦い、死んでいった。なんともやるせない不条理さを感じた。

私が搭乗してみたこの戦車に乗っていた兵士は、いったいどうなったのだろうか。

